

平成30年度 横浜市世界を目指す若者応援事業

(個人留学による帰国報告)

●氏名

TKさん

●留学先

国/都市：アイルランド/ダブリン

外国の高校：キングスホスピタル

●留学期間

2018年8月25日～2019年6月1日

●留学先での活動、留学で学んだこと

2017年の秋頃、同じ学校の1人の友達がアメリカに留学をしたことをきっかけに、僕も留学のことについて考えるようになった。最初はカナダへの留学などを考えていたものの、最終的にアイルランドへ行くことを決めた。アイルランドには日本人があまりいないため、日本語を話したくても話せない、つまり英語を話さざるを得ない環境に身を置くことができること、そしてなによりアイルランド人はみなフレンドリーであることが大きな理由となった。実は2017年の夏までサッカー部のキャプテンをしており、チームにも多大な迷惑をかけるため留学の決断はかなり難しかった。しかし、顧問の後押しなどもあり、一生に一度あるかないかの、自分にとって大きな挑戦をすることにした。8月25日、母、姉、祖母に見送られて成田空港から1人で出発した。

留学前からエージェントの方から最初の1、2か月は友達を作るのに苦しむだろうと言われていた。案の定、その時期が僕にもあった。学校が始まって特に最初の1週間は、緊張などもあって、ほとんど周りに声をかけることができず（ただでさえ英語も上手く話せなかったので）、毎日父親に励ましてもらっていた。今でも鮮明に覚えているが、初めての日曜日に僕はトイレの中で1人泣いていた。それほど友達ができないことに苦しんでおり、ホームシックもひどかった。しかし今はこの出来事も笑って話せる。というのも、この1週間を乗り越えてから自分の中に徐々に変化が生まれ、周りに積極的に声をかけることができるようになった。その後の生活は心から楽しめたと、今振り返って、そう感じている。

世界各国から多くの学生が集うKing's Hospitalの中で僕は何人かの親友を作ることができた。そのうちの1人が、ナイジェリア人のRichard（リチャード）という子だ。

彼も最初は無口で、ある日の夕食に僕から声をかけたのが最初の出会いだ。そこから

自然と仲が深まり、毎日一緒にラグビーやサッカーをしたり、時には勉強を教えあったりもした。リチャードの前では、いつも素の自分であることができたような気がする。それだけに、5月31日の別れの時は僕の人生で1番と言っていい程、つらかった。もちろんSNSでこれからも繋がることはできるものの、いざ別れるとなると泣かずにはいられなかった。たくさん話し、たくさんけんかをして憎い時もあったが、彼はいつも僕の心のよりどころでいてくれた。本当に彼には感謝しているし、僕の人生の一生の友達だと思っている。そういう友達をつくれたことも、この留学があったからこそだ。あの時の僕の決断は間違っていなかったと確信している。

1年弱の留学の中で、1番大きな出来事は2月に行われたWork Experienceというものだ。これは2週間学校を離れて、自分の好きな場所で仕事体験をすることになっている。中には自国に戻って両親の仕事の手伝いをするという子もいたが、自分は将来就きたい仕事の体験をしたいと考えた。ガーディアンからの助言もあり、ガーナで医療ボランティアを行っている団体があることを知った。というのも、僕は将来医者になりたいと思っているからだ。日本からアフリカまで行く機会などこれからのだろうと思い、多くの不安はあったもののこの機会を利用してガーナに行く決断をした。

空港の出口を出た瞬間から僕の想像をはるかに超えていた。まずは日本よりもさらに暑く、また当然黒人ばかり。自分は肌の色が違うということもあって多くの人たちに見られ、タクシーの勧誘もたくさんきた。到着したのが夜遅くで、しかも1人で来たということもあり、さらに不安が募るばかりだった。

翌日の月曜日から金曜日まで、僕はDodowa Hospitalという、かなり綺麗な総合病院で医療ボランティア（観察の時間がかなり多かった）を行った。希望により小児科を担当することになった。衝撃の連続だった。ある1人の患者さん(Mattew君)はマラリアにかかっている、当然日本にはいない。また他のある1人の赤ちゃんはとても小さかった。話を聞くと、その子のお母さんは母乳を与えておらず、栄養失調になっていた。さらにそのお母さんは本当は産みたくなかったらしい。これがアフリカの現状なのかと痛感した。しかし1つ確信をもって言えることがある。それはどの患者さんもみな笑顔だったということだ。絶対に病気で苦しいと思うし、一刻も早く元の生活に戻りたいはずだ。それでもどんなときも笑顔だった。これが医者が絶対に患者さんの命を救わなければいけない理由だと感じた。そして何より、日々不自由なく安全な日本で暮らしている僕は彼らのためにも一生懸命生きないといけないと思っている。

月曜日から金曜日の1日だけ、手術室を見学することができた。そして運よく、2人の妊婦さんの出産に立ちあうことができた。これは人生で1番衝撃的な出来事だったと思う。お2人とも帝王切開による出産で、いきなり腹を切り始めた。日本で出産の場面を見たことは当然なかったため、最初は思わず目を背けてしまった。しかし表情ひとつ変えず出産に立ち向かう医者を見たときは、これがあるべき姿だと感じた、そして赤ちゃんの産声を聞いたとき、自分の母親への真の感謝の気持ちが芽生えた。自分の、医者になりたいという夢を確固たるものにした出来事だった。

ガーナに訪問したのは、わずか1週間だったが、この経験をする前とした後で、自分自身精神的な面で大きく変化したと思っている。

このWork Experienceが終わってから本帰国までは本当にあつという間だった。学年全体でイタリア旅行に行ったり、graduation partyをしたりと、徐々にこの留学の終りを意識させる出来事が増えていった。この留学の集大成的な立ち位置をなつたのが5月上旬に行われたあるパーティーだった。このパーティーには学年全員とその保護者が集い、1年間で体験した出来事を発表し合った。僕はその中で、Work Experienceの発表の代表者に選ばれた、200人以上もいる前で1人で英語で約5分間、冗談も交えながら発表した。最後にはスタンディングオベーションでみなが称賛してくれた。これが僕の留学の成功を大きく物語っていると感じている。

2019年5月31日、ついに充実しすぎたといっても過言ではない、1年間の留学が幕を閉じた。

先程述べたように、この日は人生で1番つらかった。朝泣き、昼泣き、夜泣き、と、こんなことになるとは、最初の1週間の僕は思いもしなかっただろう。この留学を通じて3つのことを成し遂げたいと、行く前から考えていた。

①一生の友達と言えるような親友を作る

②精神的な成長をする。

③将来の夢のきっかけをつくる

この3つだ。もちろん英語力の上達もあるが、では果たして達成できたのか。間違いなく3つともYESだ。まさかこんなに充実したものになるとは、正直思ってもみなかった。貴重な経験をさせてくれた僕の両親、学校の先生方、横浜市国際局政策総務課の皆様我心から感謝を申し上げたいと思う。そして、この経験はインプットのみならず、アウトプットしていく必要がある。

これからの人生の中で多くの人に自分が得たことを還元していければと思っている。